

開催中の展覧会

企画展 潮流・下関 2021

YOSHIOKA KAZUO
SHIMIZU TSUNEHARU

11月20日(土) ~
2022年1月10日(月・祝)

カメラで綴る

吉岡 一生

私は、何時のころからかカメラを持っていなければ、心もとなく手持ちぶさたの気がするようになりました。カメラがあれば安心感があるのです。写真は、遭遇と感動の瞬間が命です。どの様な作品であろうと「何時、何処で」「今、此処」そのものです。

その「今」は、写真を見る場合は「今日、このごろ、あの時」などとなるでしょう。

作家コメントより

ひとすじの径

清水 恒治

赴くまま悦びや悲しみ、たまにはナニゲナイ日常を写してきた。写真とは、視線の先にあるものについて自分の言いたいことを鮮明に示し、なにかを伝える「ひとすじの径」と信じ、今もカメラを手にかけています。

写真の不思議さは写したある一瞬の光景やその前後の記憶を脳から呼びさまし、想像力をかきたてる魅力、これがたまらない楽しみの一つです。



吉岡一生《きょう・つれづれ》より「テカテカ石畳」
1991年、下関市立美術館蔵
「私の作品『きょう・つれづれ』は、日常の周辺でふと見かけた情景の、記録性を含めた情念創出とでも言えますか、美しさだけではない写真が主流です。いってみれば吉田兼好の心境を感じながら、これを筆でなくカメラで綴ったものです。」(吉岡)



清水恒治《蕩尽の島》1986-87年より
「人はどれ程のエネルギーを消費し、二酸化炭素を排出するのだろうか。高度成長時代を支えた石炭が液化燃料や原子力へ転換した時代の姿。最後の採炭となった高島鉱山の鉱夫や閉山から12年目の端島(軍艦島)の痕跡を発表しました。」(清水)



会場風景(展示室1) グループSYS「人間不在 筑豊65」「郷土の文化財展」展示の様子(ともに約50年ぶりの展示)

企画展

休館日：月曜日、年末年始（12月28日から1月3日） 観覧料：一般600円（480円）・大学生500円（400円）※（ ）内は、20名以上の団体料金 ※18歳以下の方、高等学校、中等教育学校、特別支援学校に在学の生徒は、観覧料免除。下関市内に居住する65歳以上の方は半額免除（いずれも要公的証明書の提示） 主催／下関市立美術館・助成／エネルギー文化・スポーツ財団・協賛／やまぐち文化プログラム



1

特別展

野村佐紀子 写真展 「海」を前に

展覧会会期：2022年

2月11日(金・祝)ー3月27日(日)

野村佐紀子は、1967年下関市生まれの写真家です。九州産業大学芸術学部写真学科を卒業した後、写真家・荒木経惟のアシスタントを経て、93年以降30年近くに渡り、写真集や展覧会での作品発表を続けてきました。彼女の代名詞とも言えるのが、学生時代から撮り続ける男性ヌード。緊張感と親密さが混在する作品が、高い評価を呼んできました。ふるさと下関で初の本格的な個展となる今回は、初期から現在にいたる約150点の作品で、写真家野村佐紀子の世界をご紹介します。

「海」に込められたもの

タイトルの「海」は、日本海に面した街、下関市綾羅木に育った野村の生い立ちに起因します。学校からの帰り道はちよど海に沈もうとする夕日に向かって進むこととなり、街全体がオレンジ色の光に染まって、それはそれは圧倒的なのだと彼女は述懐します。

海の近くで、海の気配を感じながら育ったことは、彼女の感性の重要な部分を形作っているようです。展覧会では、下関で撮影された作品も随所に登場します。それは観光ポスターに登場しそうな「いかにも」な下関とは少し違った、日常的に目にするありふれた街角のようでもあり、あるいは記憶のどこかに存在する懐かしい風景のようでもあります。現在東京を拠点に活動する野村の眼差しがとらえた、ふるさと下関の姿です。

「海」のテーマに立ち戻れば、モチーフとして



展覧会に先立ち、市内各所での撮影も実施されました。作品が展示される可能性も。

2



3



4



5



6



7



8

出品予定作品(掲載写真集もしくは作品名・制作年)

1:『裸の部屋』(1994年)、2,7:『黒闇』(2008年)、3:『GO WEST』(2019年)、4,6:『nude/a room/ flowers』(2012年)、5:『供花』(2021年)、8:『untitled』(2021年)
© Sakiko Nomura

東亜大学との
コラボ企画が進行中

大学院で映像を学ぶ学生たちが、野村佐紀子の写真から着想したオリジナルの映像作品を制作します。学生たちはまずこれまでに発表された写真集に目を通し、それぞれの企画をまとめました。11月には、大学での授業に野村氏のゲスト出演が実現。学生たちはプレゼンテーションした内容にフィードバックを受けるなど、プロジェクトは着実に進行中です。年明け以降、さまざまな媒体で公開したいと考えています。



特別展

野村佐紀子 写真展「海」

会期：2022年2月11日(金・祝)ー3月27日(日)

休館日：月曜日(ただし、祝日の3月21日は開館) 観覧料：一般1200円(960円)、大学生960円(760円)※(入館は20名以上の団体料金。18歳以下の方、高等学校、中等教育学校、特別支援学校に在学の生徒は無料。主催：下関市立美術館、毎日新聞社、YBSテレビ山口 助成：芸術文化振興基金 協賛：やまぐち文化プログラム、山口県立下関南高等学校翠ヶ丘同窓会 協力：九州産業大学芸術学部、(株)写真弘社、山口県立下関南高等学校、山口県立下関南高等学校S61同期会

距離感と関係性

写真を撮る側と撮られる側の距離感、そこに漂う空気は緊張感なのか安心感なのか、親しみなのか疎外感なのか——写真は撮る者と撮られる者との関係性を非常に敏感に映し出すメディアであるようです。野村佐紀子の写真は、被写体の一瞬の表情や距離感から、その場の雰囲気や繊細に受け止めて、シャッターが切られていることを伝えます。ヌードも含め、モデルを務める人々との信頼関係を丁寧に作り上げていく野村のスタイルが、作品のこうしたところに表れています。

女性の写真家である彼女が撮る男性ヌードは、女性が撮られる(見られる)側の性であることから脱したと、フェミニズム的な文脈で語られることもあります。しかし、野村にジェンダーロールを打ち破るのだという気負いはありません。自分の内側の表現したいものを被写体に託すのではなく、撮りたいものはあくまで自分の外側に。彼女が見据え、撮り続けるのは、ヌードを撮ることによって生まれる緊張感や感情の揺らぎ、人と人との関係性の面白さの方にあるのです。彼女はあくまで自然体で、これまでのようにこれからも撮り続けていくでしょう。写真家野村佐紀子の現在地を、ぜひ見届けてください。

副主任(学芸員) 渡邊祐子

3

報告

■ 特別展
久保修 紙のジャポニスム
～Kirié 線のかたち～展
令和3年(2021年)7/17(土)～8/25(水)

山口県美祢市出身で国際的に活躍する切り絵画家 久保修(くぼ・しゅう 1951-)の画業50年を記念した展覧会で、初期から近作までの98点を展覧しました。

本来は9月5日(日)までの会期でしたが、新型コロナウイルス感染症の流行により、8月16日(月)より県外からの利用の自粛、そして開幕から35日目の8月25日(水)をもって、10日の会期を残

しての閉幕となりました。しかしながら、延べ7,978名の方に来場いただき好評を得、盛況裏に終了したことは、無念さの残る会期末であったものの嬉しい結末でもありました。

会期中は、夏休みの期間であったこともあり、多くの家族連れでにぎわいました。関連イベントは連日満員御礼となり、作家のトークショーや切り絵の工作講座を通して、切り絵に対する親しみを感じてもらうことができましたと思います。新型コロナウイルス感染症の影響によりあらゆるところに制限がかかった中での開催でしたが、切り絵の可能性の拡がりや作家の発想の豊かさに、驚嘆の声がここそこから聞こえてくる、楽しい展覧会でした。(S)



久保修氏トークイベントの様子



久保修展会場風景

■ 特集展示
デザイナー 浜井弘治 舞台のしごと
令和3年(2021年)7/17(土)～7/25(日)

浜井弘治は下関出身の服飾デザイナー。「残糸シャツ」「和紙デニム」など、環境に配慮した素材の開発を武器に、工場に残った糸を回収した残糸シャツや、和紙を使った素材の開発に取り組むなど、ユニークな制作を続けています。浜井はこれまでに、数々の舞台芸術作品で衣装デザインを手掛けてきました。世界的に知られる空間演出家・小池博史の作品

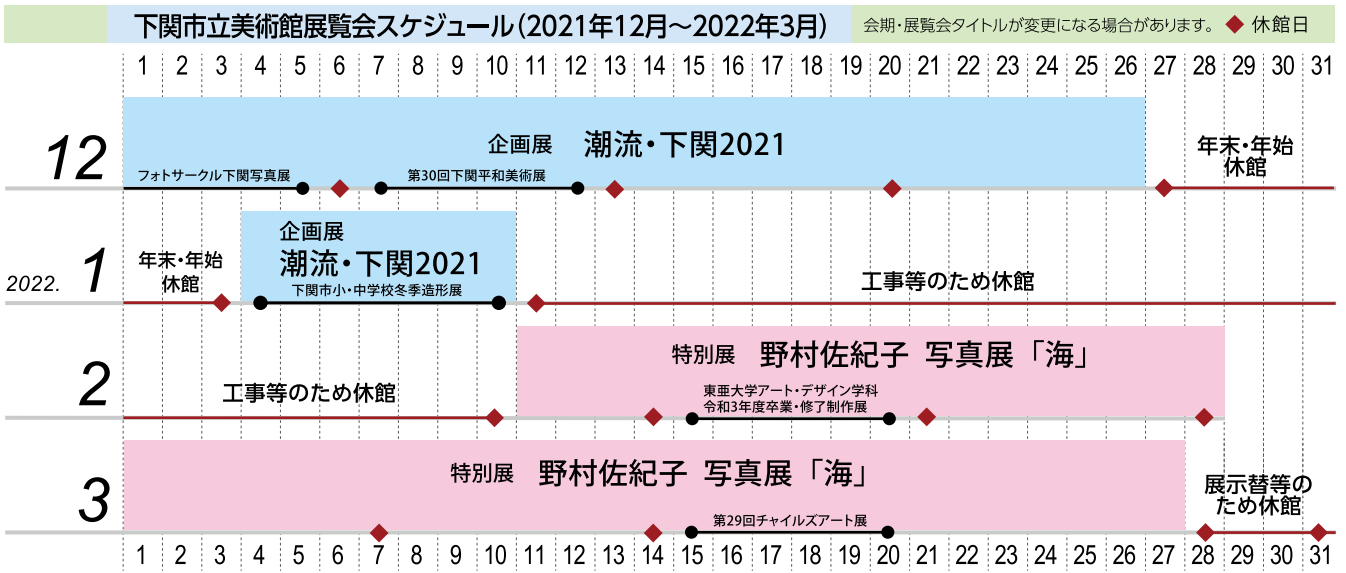
でも、約20年に渡り衣装を担当。今回はその新作「完全版マハーバーラタ」公演(2021年8月)に先駆け、これまでの舞台作品で実際に着用された衣装を、映像とともに展示しました。

会場では、浜井の構想のもと、手掛けてきた舞台衣装を上から吊り下げる、当館としては新しい展示の仕方を試みました。さらに浜井が舞台衣装を手がけた小池博史のパフォーミング・アーツ・カンパニー「パパ・タラフマラ」の舞台映像を動画で上映しました。和紙や金属など、素材の開発から服をデザインして

いくという、浜井ならではの作品の魅力をご堪能いただける展示となったことと思います。(Y)



浜井弘治デザイン舞台衣装 展示風景



下関市立美術館NEWS